

泥棒とイーダ

最終回 私に泥棒だ

牧田真有子

佐原^{さはら}さんは卓袱^{ちゃぶだい}台の赤いノートパソコンの前に座り、渋い顔で画面に目を走らせていた。彼にとってそれは何よりもまず誤字脱字事実誤認のパレードだろうか。不完全であることに對して異常なまでに不寛容なこの人の、不快指数が振り切れたら、それはもう「不快」ですらないのだろうか？ 昼に我家に來たときから、ネクタイと靴下を差し引いた格好の彼は、顔を上げずに言った。

「なんでこれほど複数の人間が、一文を打ったあと次の文頭の『w』だけ打って志半ばでやめてるんだ？」

『私』って入力する途中で間違って送信しちゃうんじゃないの」私は言った。

「二つ、三つと続くケースをどう説明する」

階下のヨーの部屋には顔を見せないまま直行したので、ここには彼とセツと私だけだった。セツは「すごいな。今更？」といやそうに笑った。「どうしてこんなことになってるのか、室木^{むろぎ}さんはどこにいるのか、森瀬^{もりせ}も関係してたのか、一体どうすべきなのか、これほど何にも状況がわかってないときに、よくそんなのどかな疑問が湧いてくるね。ネットスラングだよ、さっきのケースなら嘲笑^{ちやうしょう}」

佐原さんは立ち上がった。

「出番だ」

彼はまだ突っ立っている私とセツの間をすり抜け、素足にローファーを履いて廊下へ出た。呑みこめないまま私たちもあとに続いた。彼はすぐ隣のハイイロの部屋の前で足をとめた。インターホンを鳴らす佐原さんの背後でセツが言った。

「さっきメンバーから聞いたけど、ハイイロは三日ほど前から実家に帰ってるらしいよ」

そのとおり部屋の中から応答はなかった。鍵のかかったドアの取っ手を握ってがちゃがちゃ揺すっていたかと思うと、佐原さんは勢いをつけて体当たりを始めた。まさかと思ったが、何しろ年代物で蝶番ちょうつがいがゆるんでいたのか、扉ははげしく濁った音を立てて蹴り倒された。

階下のヨーの部屋からメンバーが続々と顔を覗かせた。「亜季あき、着いてたんだ。今の音なに？ 代表？」と言いながらヨーが階段を駆け上がつてくる。私が答える前にセツがそちらへ身を乗り出した。

「ごめん、しばらく私たちだけにしといて」

「何やってんだお前らしい加減出てここから」と二階の端の部屋からひどく一本調子で怒鳴ったのは、上半身裸であれば骨の浮き出た男だった。アパートが面する道まで出てこちらを仰ぎ、「騒ぎ起こしたら警察呼ぶよ！」と金切り声を上げたのはビーズ暖簾のれんの部屋のおばさんだ。

「すみませんでした、ここに住んでる友達と連絡がつかなくて心配で」セツは大声で言い、ヨーに向かって「一旦戻って。ごめん」ともう一度謝った。佐原さんはすでにハイイロの部屋に足を踏み入れていた。

室内は暗く、窓も締め切られているらしかった。生ゴミ臭い空気が熱く淀んでいる。照明のスイッチの位置はわかっていたが、誰も点けなかった。街灯の光を頼りに視線をさまよわせていると、襖の前に布団が敷かれており、頭まで被った厚手の掛布を低くからげてこちらを見ている室木の目があった。私はからだの内側がちかちかした。

佐原さんは布団のそばに立て膝で腰を下ろした。セツが窓を開けたが、空気は重くとどまっていた。彼女はすたすた歩み寄って言った。

「一つ訊いてもいいですか？ 森瀬はどれくらい関わってるの？ さっき逃げちゃいましたよ。場合によってはあの人のことも探さなきゃいけないから、教えてほしいんだけど」

室木は無言で跳ね起きてセツに掴みかかろうとした。彼女がまじりけない恐怖を発散させたたん、時間がぶつ切りになったように、何も

かまがゆっくりときこちなく感じられた。室木の着ているＴシャツは皺だらけだ。思うように動けず、声も出なかった。

ふいに名前を呼んで室木を振り向かせたのは佐原さんだった。静かだが逆らいがたい、ごく自然な声だ。佐原さんは両腕を広げ、自分よりずっと上背のある室木のからだを、つかえることなく抱き寄せた。最初は反射的に佐原さんを突き放そうとした室木だったが、一体何を了解したのか、ぐったりと力を抜いた。佐原さんは子どもをなだめるように彼の後頭部を撫でて背中を淡くたたいた。

「お前はもうちつとも苦しまなくていい。経緯だけ教えろ。隠し事なしで全部」

私とセツは呆然と正座した。佐原さんは室木を懇々と諭した。

「今日うちに来てたとき、俺が一人になるタイミングを計ってばかりいただろう。あれって何か相談があったんだよな。俺は話を聞こうともせず出ていった。ぴんとこなかった。たまにある。どこかが現実的に誤ってるのはわかるのに校正する箇所を特定できない。でも今はやけにしっかり見える。誰のものかわからない罪悪感とかじゃなく、自分の底から湧いてくる苦しみから救ってほしいと、お前が望んだことが」

その声には乾いた温かみがこもっていたが、室木の肩越しに闇を見つめる視線は完璧に厳しかった。

佐原さんの正式な怒りを、初めて私は目にしていた。それは恒例の機嫌の悪さではなく、おそらく自分自身への怒りだった。別の角度から見れば、自分以外への正式な慈悲となるような。

私はふと、今まで自分は佐原さんとの関わり方について、一度でも覚悟というものをもったことがあるだろうかと思った。

「ああいうお金集めの方法を僕は知らなくて」
くぐもった低い声で室木は話し出した。

「森瀬が教えてくれたんです。彼女は、とにかく惜しまない人でした。自分のもってるもの、時間でもノウハウでも何でも、与えようを与えようとしてくれた。彼女が盗むということはないと思う」

最後の一言はセツの先ほどの問いに対応しているようだった。セツはちよつと頭を上げた。

「僕は本当は怖くて、できればやりたくありませんでした。だけど一緒に話を聞いていたハイイロはすぐ乗り気になりました。毎日のように焚^たきつけてくるんです。たぶん、イーダ会でいちばん村を作りがつたのは彼だったと思いますよ。代表に生きていてもらうために」

あなたももう少し手を打つべきです。郵便受けに入っていたハイイロからの葉書に切手は貼られていなかった。ずいぶん前に目黒さんと、「自分であることをやめて代表と自分の人生を同一視できさえしていれば、ハイイロは気が済むのだらう」と話したことがある。でもそれはあまりにも目の粗い仮説にすぎなかった。

「ハイイロに押し切られた、というだけではフェアじゃないですよ。僕にも動機はあったんです。メンバーには秘密で資金を貯めて、あつと言わせたかった。現実味がないからと村づくりを軽視してくるセツを見返したいと思ってました。そういうふうにもけりをつけないと、自分が彼女に何をするかわからないような状態でしたし」

セツは指を組んで膝の上に置いていた。室木は抑揚なく話し続けた。

「イーダ会という名前を出すのは目標金額を達成してからでいいと、金の使い道もあとから融通が利くと、思ってたんです。最初は……いったん支援者を得ることそのものが目的となると、ハイイロはかなり割り切った企画を立てました。大きな存在の一部として生きるための村、というような理念は後退させて、『林の中にギャラリーを兼ねたコミュニティカフェ *sem título* を作る』と的を絞って。あ、ハイイロによると『無題』のポルトガル語だそうです。募ったのは、現地にある古い農家をリノベーションするための資金でした。土地は森瀬が使用を許可してくれましたし、彼女にはその手の知り合いが多いようですし、僕が調理師免許を持ってますし。今までに実践してきたこと——我々を含め生きづらさを感じる人たちと共同で営んできたことってありますよね、シェアハウスのようなスタイルとか、ハウスというかアパート単位ですけど、

それと有機栽培とか手作り市でのパン販売とか。それらについて説明しつつ延長線上のプロジェクトとして設定する。そうすれば見る人にも順当に映るはずだと彼は踏んでました。今まではスペースの問題もあった、固定的なつながりにならざるを得なかったけれど、今後は広い場所でもっと多くの人が気軽に交流できるゆるやかなコミュニティをめざす。そういうストーリーを用意してきたんです」

ギャラリーというのは貸し画廊のようなものなのか、疑問が浮かんだが、佐原さんとセツは別として私だけは絶対、彼に問いかけてはいけない気がした。私のからだはしんと緊張していて正座の足を崩せなかった。やがて室木が言った。

「ギャラリーの機能についてはもめました。最終的に決めたのは僕です。作品でも文書でもいい、色んな人が自分の得意分野をアピールできる場としての利用です。カフェの客同士で売り手と買い手として取引が成立することもありうるし、他人の得意分野との思いがけない組み合わせから、新しい価値を生み出すことだってできるかもしれない。そうやっていま立ちどまっている人が一歩踏み出すためのきっかけをつくる装置になればという、まあ、筋書きですな」

彼がどうしようもなく憎んだ個人はセツだったのだ。そのことによって彼もまた決定的に個人になってしまったほどに。それなのにギャラリーのあり方は、現行のセツの目録とあまりにも似ていた。

「実際にプラットフォームに掲載されると、自分がどの馬の骨とも知れない人間であることが不安でした。相手は不特定多数の見知らぬ人たちばかりだから、こちらにそれなりの実績がなければ信用されにくいんですよね。ハイイロは、プロジェクトを応援する人からのメッセージ枠に注目しました。イーダ会に入ったことで新たな展望が開けた人物に証言してもらえばいい、と。証言を発表する際には『イーダ会』という文言を抜き取って調整するんだから、ぺてんです。でも僕は全部打ち明けて内林^{うちばやし}さんに協力を頼んだんです。彼女は口が堅いし、僕の計画を秘密にしておいてくれると思ったからです……それ以上に、彼女は頼まれれば

断れない性格だと知っていたからなんですけど」

それまで、単に傾いた電柱のようだった室木は、ゆっくりと佐原さんにしがみついた。ゴールを決めたサッカー選手たちが威勢よく抱き合うのならテレビで見かける。しかし普通の成人男性同士の長く静かな抱擁にはなかなか目が慣れなかった。

「彼女は期待以上に応えてくれました。生きることには過剰な違和感のある、そのぶん深い欠落部分をもつ自分が、やはり似たような傾向の人たちと共に足りないところを補い合いながら無理なく暮らすうちに、長年患っていた鬱病が治った。『共同生活』には躊躇する人もいるかもしれないから、今回の企画は是非実現してほしい、と寄稿してくれたんです。でもやっぱり不安でした。作業は僕の家でやりました。頼めば森瀬は機嫌よく来てくれます。僕たちの細工を見てもとがめなかった。危険だと判断したら森瀬がストップを掛けてくれる、トラブルが起これば対策を講じてくれる。そういう予想に支えられていた。でももう彼女と連絡がとれないんです」

最後の方の声は囁^かれていた。彼が咳き込むと、佐原さんは掌を室木の長い背骨に沿わせてさすってやった。生ゴミの臭いは消えたりつよまつたりしている。結局のところ見て見ぬふりをしていたに過ぎなかった森瀬は、室木の部屋で一体どんな表情をしていたのだろう？ 冷笑か、好奇心か。彼女自身が「煩惱」だと言う優しさか、無表情か。

闇に馴染むにしたがって、ハイイロが部屋の様子を佐原さんのそれとそっくりに設^{しづ}えていることがわかってきた。卓袱台や文机の配置、衣装ケースの数。佐原さんの部屋の近寄りがたい書棚に相当するのは、おびただしいCDが収まった背の高いシェルフだ。背表紙までは見えず、ハイイロの、あの余韻のない大声から剝離した響きが録音されているみたいに思えた。卓袱台の上にはデイスプレイを中途半端な角度に伏せた室木のノートパソコンが置かれ、プラグは引き抜かれている。

「正直、目標金額には届かないんじゃないかと思ってました。達成できたのは、ネット上でもリアルでも顔の広い森瀬がSNSを使って宣伝を

拡散させてくれた影響が大きかった。彼女は色んな人の手伝いをしていて、ただあって協力者も多そうです。でも一方で、少しでも共感されやすいように、と僕とハイイロが調節したストーリーを信じ込んで出資してくれる人や、内林さんのメッセージを読んで支援を決めたという人もいたんです。内林さんは、自分が気を遣って応じた内容が誇大広告になったことの罪悪感に、押し潰されそうだったと思います。でも、優しくて繊細かもしれないけど、彼女こそ想像力が欠けていると思いませんか。予測されるとおりの事が起こっただけなのに、耐えられなくなって他の人に打ち明けるなんて、それなら最初から応じなければよかったんだ。今までずっと親切に生きてやってたのに裏切ったんですよ」

闇の中を、このときだけは室木の緊張がありありと伝わってきた。思わず口走ったのではなく、殴られることも念頭に置いた上で佐原さんを試したのかもしれない。佐原さんは体の構えも手つきも変えなかった。それによって身じろぎしたのは室木本人の方だった。しばらくして彼は言った。

「わかってるんです。僕も、実際に見知らぬ人たちから支援されるまでは、支援されることのプレッシャーなんて予想できませんでした。共感させようと自分で仕組んできたのに、実際に克明な善意を振り向けられると、監視されてるような気がした。内林さんが打ち明けた相手はタモツです。代表は覚えておられないと思いますけど、ひと月ほど前から時々顔を見せるようになった女子学生です。内林さんがどうして自分よりずっと年下の女の子になんか相談したのかはわかりません。タモツが、少々度を越して正義感の強い子だから、もう何もかも見破られているような錯覚を起こしたのかもしれない」

森瀬効果により見知らぬ人とメンバーとが入り乱れ、佐原さんの部屋は飽和している。私はタモツという人物を知らなかった。室木は続けた。「タモツは森瀬のことをよく知っていたみたいです」

「いや、そんなことないですよ。最初に会ったとき森瀬は自己紹介を求めてたもの。私も一緒にいたから覚えてます」

セツは抑制のきいた声で言った。室木は、似ているが異質な、のっぺりした声で返した。

「知ってるといつても、面識はなかったんだよ。タモツはネット上で一方的に森瀬に憧れて追っかけのようなことをしてたらしい。白元君^{うすもと}みたいに、森瀬と現実世界での対等なつながりがあったわけじゃなく。だけど森瀬の記事を読んでイーダ会に来たんだってことは黙ってたし、そもそも森瀬の前でも見ず知らずの人間として振舞った」

「どうして？」

セツは言いながら立ち上がり、壁際の脚立に軽く腰掛けなおした。

「彼女は、ネット上では森瀬と簡単に同化できたみたいだけど、生身の森瀬が相手では勝手が違ったんだろう。最終的なところではなんにも信じゃない。自分だけが正義なんだよ。とにかくタモツは森瀬の取り巻きでいることより、名前を騙^{かた}って不可解な団体に潜入し、欺瞞があれば即時告発するっていう突拍子もない使命を、自分に課すことを選んだ。で、欺瞞の方から飛び込んできてくれた」

「室木さんもそういう一切はタモツの投稿を読んで知ったんですね？」

尋ねたのはセツだったが、室木はまた佐原さん一人に伝える口調になっていた。

「内林さんが直接ばらしたのかと思って問いたしたら、自分ではない、匿名記事だけどタモツ以外に考えられないと言いました。もちろん、何より聞きたかったのは二百万がどこへいったかっていうことでした。僕の通帳や身分証明書や印鑑を持ち出すことができる人は何人かいて、その一人が内林さんだった。内林さんはタモツに言いくるめられたんですよ。タモツは、自分ならこのお金を、もともとの持ち主よりもはるかに有効に使うことができると言ったそうです。一人ひとりに還元したら、そんなに大きな額じゃないし、その人の欲望を満たすただけに使われて終わるかもしれない。良い使い方として一旦差し出されたものなら、その目的を遂行するべきだ、って。彼女が私利私欲のために使わないのは保証できます。結果的には僕らが使うより効率よく世の中の役に立つ

でしょうね。だけどこんなのは間違ってる」

室木は単調だった話し方から一転して深いため息をついた。それから佐原さんの二の腕を掴み、自分の身を引き離れた。佐原さんは日常的な顔つきで彼を見上げて言った。

「よし、偉かった。洗いざらい白状するとはこのことだ。お前はもう帰って、もなか食って養生しな。あとのことは心配ない。カネの方も大丈夫だ」

壁際に小さな灯りが生まれ、セツの顔を照らした。彼女がスマートフォンを操作しだしたのだ。伏せたその顔には、新鮮な失望と、次の手を打とうとする意欲とが打ち寄せていた。室木は最初の二、三步こそふらついたがあとは普段どおりの足取りで玄関まで行き、蹴り倒されたドアの下からスニーカーを引っ張り出して、一度も振り返らずに出ていった。彼は私たちと、とりわけ私とは絶対に目を合わさなかった。佐原さんがプラグを差し込んでパソコンを起動させる。私は痺れた足を動かして電気を点けに行き、彼の傍らで、ゆっくり落下するように正座した。

イーダ会のブログに投稿される誹謗中傷の数ひぼうは短時間のうちに膨れ上がっていた。独立した掲示板も立ち上げられたらしい。

『サイトを見てみたが活動内容が不透明すぎ。しかもイレズミってなんかやばくないか?』『クラウドファンディングという全く新しいシステムにはかなり期待してる。それだけに今回のようなことが起こったのは非常に残念。自分たちがしたことの軽率さについてしっかりと反省してほしいな』『代表者がいい意味で終わってる』『自分たちだけが正しいって思ってるのはキモい。』『かなり理想主義的な集団に見えるが、そもそも悪意はあったのか? そのへんがよくわからないんだが』『追い込んで、消滅させろ』『一部の会員が暴走しただけということもふつうに考えられますよね? この会がめざしているところ自体、好き嫌いは別として社会的には問題ないんだから、会のすべてを批判するのはおかしくないですか?』『てか実際に金ばくられたんでしょ? 通報すりゃいいじゃん』『犯罪は犯罪』

中立的な意見やイーダ会への擁護も含まれていたが、不特定多数の人々の感情のほとばしり、どこからともなく殺到することばたちのうねりそのものが、似非^{えせ}会員にすぎない私の感情さえぐちゃぐちゃに踏み荒らした。それなのに、一瞬そのパレードは、イーダと重なって見えた。もう個々に還元されることのない共鳴の姿だ。

実際に損失を被って腹を立てている人もいれば、企画には全く参加していなかったが腹を立てている人もいる掲示板には、どうやって割り出されたのか、セツの勤務先や卒業大学や住所、顔写真までが晒^{さら}されていた。その真珠の首飾りとシトロニエローのパーティードレスは、披露宴帰りの彼女と会ったときに見たことがある。善意の金を着服すべく裏で糸を引いていた疑いのある不審な団体の長として、佐原さんもやはり批難されていた。彼を直接知る人からここぞとばかり過去の暴挙を書きたてられ、もはや今回の問題とは関係なく独自に紛糾している。

リュックサックを背負ったまま正座している自分の姿によりやく気づいた。いつのまにか風が出はじめていた。それでも汗が顎から滴ってワンピースに染みをつくる。私は二人に訊くともなく訊いた。

「森瀬って、一方ではイーダ会について紹介して、一方ではイーダ会とのつながりを隠したまま、そのポルトガル語の店名だけで宣伝してたわけだよね。責任を問われないの」

「一応謝ってはいるみたいだけど、いつものあの調子であっけらかんとしてるね」

片手間の声だったが、答えてくれたのはやはりセツだった。

『「こんなことになるなんて予想できなかった。詳しい経緯を理解してないまま情報を流してしまったのはこちらのミス。次はまた面白いことを成功させましょう」って」

「あの人は全貌を知ってたよ」

「ただ根本的に悪意があったわけじゃないだろうし、こんなトラブルが起こっていなければ土地だって本当に貸してくれたと思うし」

ブログのコメント欄には、こんな非常事態にもかかわらず、いや、だ

からこそ一種の後援のつもりなのか、『代表こんばんは。私はもうそこにいますか』というメッセージも大量に交じっている。それはバッシングする側の人たちから痛烈に侮辱され、恰好のからかいの対象となった。実際、イーダ会の胡散臭さを証明しているようなものだった。

それまで専ら画面をスクロールしていた佐原さんがキーボードの上に指を置いたとき、私はさして注意を払わなかった。彼は文字を打った。

『います』

私は思わず上半身を乗り出し、佐原さんの横顔を凝視した。同じ部屋にいながら、自分の掌の中の画面で異変を知ったセツも、「ちょっと」と顔を上げる。彼は意に介さず、一件一件に対して『います』とレスポンスを繰り返した。コメントが届くスピードは加速し、中には悪意を込めてなりすましている投稿も少なくないと思うが、佐原さんは次から次へと肯定した。批判や罵りの量は跳ね上がった。

物音で振り向くと、壊れた戸口に数人のメンバーが立っていた。

「代表。そんな返事しちゃってどういうつもりなんですか。責任、取れるんですか。それにさっき出ていったの室木さんですよ。いいの？ 行方、くらましちゃうかもしれない」

ヨーが言った。セツは焦点の定まらない目で彼女たちを見比べてから言った。

「ごめん、もう少しでいいから静かに考えさせて。ちゃんと最後には、どうするか報告しにいくから、戻ってってくれる？ ほんとにごめんなさい」

もどかしげにヨーは頭を振った。

「謝ってほしいわけじゃなくて。セツも含めて私たち皆の問題でしょ？ セツだけが当事者の顔をするのって間違ってるよね」

私はメンバーの多くを好きだったから、彼らの顔を立てながらセツの味方に就きたかったが、時間がなくて片方は諦め、言った。

「全員の問題だからって全員で話し合っても、全員納得できる解決策が出てきますかね。自分のことを自分がいちばん知ってるのは当然だけど、

皆の中でいちばん皆を知ってるのはセツですよね。目録〈Iida〉に、セツの頁はなかったけど、もしあったとしたらあの最後の欄は、『自分一人以上の存在になってしまふ』かもしれない」

案の定メンバーたちは苛立った目でいっせいにこちらを一瞥^{いちべつ}した。私は重たくてとても持ちにくい破れドアを盾にして、平謝りしながら彼らを締め出し、ぐらぐらするそれを辛うじて立てかけた。

佐原さんは顔の見えない人たちに向かって『います』を送り続けた。それに対する彼らの反応はまちまちのようだった。沈黙。感謝。拒絶。希望。狼狽^{ろうばい}。私はかつて聞いた、佐原さんの夢を思い出していた。自分の動きに伴って間取りが変形する建物。視界のすべてが自分の透明な衣であるという広大な閉塞感。

『こわい夢を見ているのはあなただけではありません。』

あのときの彼は私にそう書いて寄越した。

一旦占拠された佐原さんにとって、慈悲に占拠されるのがもうこわいことではないのなら、今あれは「こわい夢」ではないのかもしれない。嘘でもいいから彼らをなぐさめようとしているふうには見えなかった。佐原さんにとっては、彼らは本当に地続きで佐原さんともにある。

「そうだ、すぐに払い戻すってこと支援者の人たちに伝えないと。あとは現状のままでもいいこう」

セツが言い、思い出したようにパーカーを脱いだ。

「私の指図ってことで済ますのがいちばんあっさりする。これだけ晒されたら、今更訂正してもしなくても大差ないし。そうだ亜季、さっきありがとう」

「やめてよ。そんなこと決めさせるために、あの人たちを追い出したんじゃないのに」

「いや時間稼ぎのことだけど、目録の私の欄を埋めてくれて」

「皆の身代わりになるなんていう悪趣味な意味は込めてない。駄目だつて。絶対嫌だ」

「なんで？ 特技欄が『自分を明け渡してしまうこと』でも？」

彼女は脚立から立ち上がってパーカーを腰に巻きつけた。すぐにでも行ってしまうそうだった。私は喉が渴いて仕方なかった。セツを頭数に入れた作業をしている間ならとどまってくれるだろうと打算して、勝手にハイイロの冷蔵庫を開け、グラスも三つ借りた。ミネラルウォーターを注ぎながら私は必死で言った。

「偽の証言をするってことだね。目的は違っても、内林さんのしたのと同じじゃない。ダメージを最小限にとどめるために真実を押し流すとかって、正義でも何でもない。事実を知りたがってる人たちには、事実をありのまま説明して、室木さんやハイイロや内林さんやタモツに責任を取ってもらうべきだよ。私は前に、他人が受ける予定だった罰を引き受けたことがあるけど、おそろしいほどその人のためにならなかったよ」

シンクでは皿が何日か前の水に浸けられ、三角コーナーにたくさんこばえの小蠅が音もなかったかっている。室木を売るような物言いをする私の頭に、春先の河原でのど飴のパックを差し出してくれ、私がパイナップル味を選んだら少し笑った室木がよみがえってきた。

「あの人たちは立ち直るのにすごく時間がかかる。私なら彼らより速い。この差はこの差で事実だし、誰が自分かというのは留保して、無駄の総量が少ない方を選びたいんだけどな」

セツは言った。

たえずざわざわとメンバーたちの声が聞こえる階下で、ひとときわ大きくなどよめきが起こった。「これって脅迫だろ」「この住所も載ってる」パニックに陥った声がつれあっているせいかな、どのメンバーのものかすぐにはわからなかった。「ふざけんな、何時だと思ってるんだ。通報するはずないって見くびってるなら大間違いだよ」という、アパートの骨組みから揺るがすような怒号の出どころだけが確実だった。

「すげえな、あのばばあ」

騒音には無頓着な佐原さんさえ感心して顔を上げた。そしてそのままセツの方を向いた。

「全部俺がしたことだって言うから」

セツは佐原さんよりも私の表情を見た。私は、彼女を説得したばかりのせりふをそっくり彼にも繰り返さなければならぬことに打ちのめされながら、口をひらきかけた。制するようにセツが片手を突き出した。

「私はどっちでもいいよ。ちよつとヨ一の部屋に行つてくる。これ以上待たせられないしね。十分は、場をもたせておくから、その間に決めていい？」 延長はナシで」

そう言つて彼女は立てかけた扉の隙間からするりと出て行つた。

台所に立つたままの私を、座卓越しに佐原さんが見上げた。

「言えよ」

私は説得を開始した。まるで演じているみたいに感じるのは、今しがたと全く同じことをもう一度口に行っているせいだ。最初はそう思った。でもだんだんわかつてきた。一度目と二度目の間には厳然とした差があった。「護りたい」と「思うようにさせてあげたい」を両立できないように。尊敬と恋が違うように。

途中で私は黙つた。彼は言つた。

「俺の命は今のところ空いてるから、資源としてリサイクルに回す」

「私には埋めさせてくれないというわけね」

「あとで郵便受けに通帳類一式入れといてくれ。おい、しけた顔すんな。お前の言うことを、今度は本気で聞くから」

セツがしようとしたのは、嘘をついても被害を最小に食い止めようとする自己犠牲だった。佐原さんのやり方は、現実的に境界をなくしつつあるからできる身代わりだ。自分と室木さんの境界。森瀬との境界。ハイイロや内林さんやタモツや、たぶん他のメンバーたちや、ひよつとしたら今自分を攻撃してる人たちとの境界さえ。私との境界さえ。

「佐原さんがくつろいでいるところをやつと見られた。本当は、身代わりなんかによつてじゃなく私との関わりによつて、目にしなかったけど、でも佐原さんが、あなたの死に伯仲するものとして前者を選ぶなら、私は肯定する。私自身の方を変える」

「変えるって。どんなやつになる気だ」

佐原さんは子どものようにふしぎそうな顔をした。私は言った。

「わかんないけど。とりあえず今より心が広くて、我慢づよくて、悪い人になるよ。そしたらあなたを見過ごすことができる」

室木や内林さんを結果的に不幸にするかもしれないとわかっていて、佐原さんのしたいようにさせるのは、私のわがままでもあった。誤りを認識しながら見逃す、その行為自体は森瀬と同じだ。

水を飲み、やはり佐原さんの部屋と同じ場所に掛けてある時計に視線を移そうとしたとき、彼が言った。

「お前のことを好きになった」

「今？　嘘でしょう、ちよつとくらいは好きだろうと思ってた」

私は驚愕した。佐原さんは優しい表情で「俺を信じろ」などと言っている。時折吹く勢いのある風が、真夜中の匂いの空気をどさっと運んでくる。

「あと五分ある」

文字盤を見て私が言うと、佐原さんは「よし来い」と大型犬の飼い主みたいにその場ですがしく両腕を広げた。私は流し台にもたれたまま俯いた。行けば室木と同じようにしてもらえるのはわかるが、公園のぶらんこのそばで「次は自分の番だ」という顔をして待っていた子どものように見られたのではないかという、妙にこじれた気持ちでぐずぐずしていた。

雑木林の無数の枝葉を鳴らす風の音や、遠い大通りを走る車の音が、打ち寄せては流れ去った。気がついたら目の前にさっぱりした鎖骨があった。私は急にうれしくなって指先を置いた。佐原さんは当たり前のように抱き寄せた。

白いシャツを着た彼の体は、強烈な行き止まりのような、私の世界の果てのような感じがする。同時に、まぶた瞼を閉じると、風になびく暗い雑木林のなかにいるようで、一本の木になっていく自分たちを見失いそうになる。私は幸せだった。私たちが生みだすことを許された五分間みたい

に思えた。それはこわいほど長く感じられた。

彼は最後にひときわ思い切りよく抱きすくめて言った。

「今は、すごくいい。他人のことまで我がことのようにだっていう、くだらない事態との間に軋轢あつれきがない。しかもその真つ平らなところから突出して一人、好きな女もいる。こんなにむしのいい、存在してみてもよかったといやでも思わされる時間は、めったに味わえるもんじゃないよな」

私は顔を押しつけたまま少し笑った。そして、「今後の人生どうにかしてそれをキープできないの」と言っていていいかどうか、もし私が「あなたを見逃す」という前言を撤回したら今目の前にある現象がどの位置から崩れていってしまうのか、目が回るほど迷いながら顔を上げた。

しかし彼は私にそれ以上迷わせなかった。

「俺がお前を変えてもいいいか？」

「うん」

「清丸」

佐原さんは私をそう呼んだ。あまりにも、心の洗われるような笑い方だった。私は言葉を失って、その名前の響きを全身で吸いとった。彼の名前は佐原清丸という。

彼が踵きびすを返して部屋を横切っていくのを見つめていた。手ぶらで素足で、体の軸が定まっている。それは、ようやく終点にたどり着く人ではなく、今から遠いところへ行く人の足取りだった。私は動悸どうきがした。彼がおそれていたのは、有限な自分がきりのない慈悲に消耗されることだけではなかったのだと思った。慈悲を深めるわけでもなく、そこもまた扉を一枚開けるようにすぐに通過してしまうだろうこと、その向こう側は本人にも予測できないこと。そういうものだったのだと。

目の前の人間を、佐原さんは自分の名で呼んだ。名前を預けることはおそらく、生きながら死ぬことだ。生きながら、生まれる前に戻ることだ。棄すてるのでなく、彼は私に預けてくれた。自分自身をほどききる寸前に、彼は佐原清丸というひとりの人間を一瞬あわれんだのかもしれない。

彼が鉄骨階段を降りていく音が聞こえる。私は血の気が引くのを感じていた。掌ににじんでくる汗をワンピースの腿ももの辺りへ頻しきりになすりつけた。絶対行つてほしくないのに、それを行動に絶対移してはならなかった。

顔と同じ高さまで上げた二つの冷たい掌てのひらを、できるかぎりはっきりと観察した。私は泥棒だ、と心の中に大きく書いた。彼は彼をやめることでしか行けない世界に行く。私は世界から自分を奪い取って走っている。佐原清丸まで組み入れた自分を、できるかぎりはっきりと経験するため走っている。

彼はたしかに私を変えた。私に、覚悟をもたせた。

佐原さんに有罪判決が下されたことを新聞の小さな記事は簡潔に報じた。ネット上には一連の騒動を効率よく閲覧できるよう集約したサイトが現れた。彼が地元では名の通った怪人であることが災いし、佐原さん及びその一味をめぐる情報は続々と継ぎ足されていった。

「代表」は児童の頃から暴力沙汰を起こしてきたこと。長じてからは近隣住民の失笑を買いながら偏執狂的な善行を積んでいること。裕福な家庭に育ち学歴も高いが社会に適合できない若者たちが、代表を教祖のように崇めた挙句、犯罪に加担させられたこと。代表と半同棲状態の女子高生との間に金銭的な関係があったこと。その古いアパートの一室に入れたわり立ち代わり男女がたむろして風紀上よくないばかりか、空き室にみるみる会員が移り住んできて住民の頭痛の種だったこと等々。

自分たちのことであるようなないような情報が自分たちの前を流れていくのを、メンバーはそれぞれどこで見ていたのだろうか。あの直後に発覚したのだが、ハイイロが実家に帰っていたのは借金の申し入れが目的だったらしい。消えた資金に代えるためだ。ふしぎな名前の団体に息子が属しているのかねてより懸念していた両親によって、ハイイロは逆に、ほぼ力づくで引き止められることになった。

めったに事件の起こらない狭い街では、佐原さんをめぐるゴシップに次から次へと人々が飛びついた。彼との関係が取り沙汰された私にも当然好奇の目が向けられた。執行猶予のついた佐原さんがこの街から姿を消し、大方の会員も散り散りになった以上、彼の身内か、居場所の定まっている私が標的になるのは避けられないことだ。俊子^{としこ}さんは、弟の話を聞きだそうとする人には、後にその人が思い返すたび息のとまるような冷淡な態度をとるなどして、護身に努めていた。彼女が拒んだので佐原さんの私物は全部私が引き取った。

近所の人たちは私を通してただ視線の種類を変える。小学校時代の友人から「久しぶりにゆっくり話そうよ」と連絡が来て、訪ねてみると当人以外は知らない女の子たちばかりが部屋にひしめいていたこともある。初対面の相手なら訊くはずのない問いも躊躇なく発せられた。「ボランティアサークルに見せかけたカルト集団だった」とまるで私自身が言ったかのように伝わっているのを美容院で知ったときは、頭に泡を載せたまま隣の客に決闘を申し込みたくなった。

中三のとき私の髪を切り、ほんの数ヵ月前調理室で握手した男子生徒に、「やっぱ屑^{くず}じゃん」と廊下でいきなり言われたりすることはあったが、学校では事情が大きく異なった。校内である程度の影響力をもつチカや沼男が、一貫して味方に就いてくれたおかげだ。沼男はしつこい人にはロシア語で怒鳴り散らすという風変わりな作法を身につけた。「今のって、もし翻訳されたら臨時の全校集会ものなんだぜ」と自信ありげに言う。良し悪しは別としてぶれないのは両親も同じだ。彼らが世間から、度肝を抜かれるような質問を受けていないはずはない。だが彼らは理想の家庭像の運営を優先した。その像の中では娘がゴシップに巻き込まれる事態など恒久的にないのだ。もし両親から詮索されていたら私はそれだけでくたになっただろう。

それに、セツがいた。佐原さんによって覆されたとはいえ、個人情報晒されバッシングを受けた彼女の社会的なダメージは深かったはずだ。彼女もまた住む場所を変えた。それでも淡々とした風通しのよさを、少

なくとも表面的には維持しているセツを前にすると、私が事件後の日々のすごしにくさを訴えるわけにはいかなかった。

実際なんといっても辛いのは佐原さんを失ったことだった。その一点に尽きた。

最後に見聞きし、触れた、佐原さんの白いシャツや体温や、顔周辺の塵を一掃するようなすごい微笑みや、目尻にできた細かな皺、手の甲に浮き出る血管の枝分かれ、乾物屋で買ってきたようなからりとした声が、私を息苦しくさせる。信じられないほど息苦しい。その極端に濃い感情は、もし反射的な言葉に置き換えるなら「たすけて」が近いかもしれない。ただ、どうにか沈黙していれば、それが、たすけてほしいという思いとは全く別の方向性まで含んでいるのが見えてくる。暗闇に目が慣れてくるみたいに。

どこかにいるのにもう会えないことは悲しい。それは日常的にやむなく遭遇する雑多な悲しみよりも、厳しいほど美しい風景をたまたま目撃したときの衝撃の方に近い。現実とは思えないその景色から私は目をそらせなくなる。まさか味わうとは思っていなかった異様さをたしかに味わっていることの、仄暗い興奮の波に洗われる。

正確には、佐原清丸という人はもうどこにもいない。私が預かった分だけだ。もう私自身の中にしかない。気が狂いそうになる。そして、自分が今ここにいるということの異様さを少しも軽減できないまま、それと瞬間的にであれ渡り合うような異様さをもつことは、ときに深い喜びとさえ結びついているように見える。私はひどく混乱する。むりやり目をそらすとかえって疲れるから、私は見入ったままにいる。

過去の時間なら遠ざかっていくてくれる。でも佐原さんとのあの五分間は、今この瞬間のちやうど裏側に、今この瞬間と同じ鮮度で存在している。それはいつだって表になりうる質を最初から獲得している、もう一つの「今」のようだった。それはいつだって私を殺しうる類いのものだという気がした。だからこそ、生きている私に必要だった。たすけてほしいという思いとは全く別の方向性のものとして。勝見亜季^{かつみ}だけでな

く佐原清丸まで盗んで走っている道を、時々きつく照らすものとして。

執行猶予を満了した後の佐原さんの行方は誰も知らない。

年に一度、航空郵便で厚い封筒が届くようになり、三年が経った。

大学在籍中にロシア留学を果たした沼男は、現地に赴いてからようやく読んだロシア文学の虜^{とりこ}となり、向うで心ゆくまで勉強して賢そうな彫りの深い顔になって帰国した。空港まで迎えに出たチカと私がちやほやしている内に、顔はもとに戻ったが、新しく身につけていた強度のようなものは消えなかった。この春からはどういわけか京都の老舗ホテルで黒いスーツをきりりと着て働いている。「でもまた針葉樹林帯のある方角へ引き寄せられちゃうかも」というのがチカの見解だ。大学で国際関係学を専攻したチカは、海外を飛び回るジャーナリストという聞くだけで腰の抜けそうな目標のため独自に計画を練り、今は東京の出版社で編集の仕事をしている。

事件の後ほとんど口をきくことのなかった史^し乃^のも、県内の短大を卒業すると同時にその大学の准教授と結婚し、もうこの街にはいない。あの夏の終わり、一度だけ柳のある中庭で彼女に呼びとめられたことがあった。森瀬から何か連絡があったかと、史乃は私に尋ねた。私は首を振った。

「こういうことが起こる前に、あれを自分で盗りに行けたのは、よかったと思ってる」と史乃は言った。

室木が言うとおり森瀬は他人に自分のものを与えるのを惜しまない人だったのだろう。その責任まではとらないというだけで。彼女が史乃に愛着を持っていたことは事実だと思う。だからといってそんな自分に棄てられたときの史乃のことまで想像したりはしない。彼女は何も否定せず、増殖させるが、個々のものごとを繋がないのだ。

森瀬の白い顔を思い出す途中で、中学生の高峯^{たかみね}の顔に入れ替わることもある。たった一人の転校生に裏返された教室。あのと私の私は、高峯

のルールの外へ出ることができた。けれど、こわい面だけでなく善い面も自分より多い森瀬の域は、あまりに広く曖昧で、そこを超えることなどできないのかもしれない。

セツは会社を辞めて猛勉強を始め、ＩＴ全般について一から学びたいとアメリカで大学に再入学した。もともと語学はずばぬけて堪能な人なのだ。長い休暇があるたび滞在させてもらった私も、英語だけは身を入れて勉強した。彼女が卒業予定だった昨年、帰国を心待ちにしている私に届いたのは、「面白くてやめられないので大学院に進んでみた」という相変わらず風通しのよいメールだった。一箇所につづけては視野が狭くなりかねない、アルバイト先を幹旋あっせんしてやるから亜季もこちらで暮らさないか、という追伸もあった。

たしかに実家から通える範囲の短大に進み、就職したのも近所のショッピングセンターだが、セツからのメールを受け取ったその頃は丁度私も瀬戸際にいた。父の急な転勤で一家揃って名古屋に引越す話が出たのだ。しかし結局私は残りたいと言い張った。佐原さんからの航空郵便を受け取るためだ。転居先の住所を、こちらから佐原さんに知らせるすべはない。家を売却するか賃貸に出すか検討中だった両親は、寮母をするから下宿屋にしてほしいという娘の謎めいた申し出によってさらなる困難を抱えた。

不動産問題に揺れる我が家にすっきりした形の助け舟を出してくれたのは、目黒めぐろさんだった。

彼女から電話が掛かってきたのは突然だった。イーダ会脱退後、本格的に刺繡ししゅう作品の発表と販売を展開した彼女は、数年がかりでネットショップを軌道に乗せていた。

「アメリカでセツの仕事の手伝いをするってほんとですか」と彼女は言った。厳密には違ったが、私が彼女の情報通ぶりに脱帽していると、目黒さんは畳み掛けた。

「あの代表に恋をする心理というのは頂けないものでしたけど、亜季さんが気の長いことだけは、よくわかりました。根気の必要な仕事にあな

たは向いてます。私思うんですけど、亜季さんはいつどこへ行くことになるかわからない人ですよ。代表の彼女なんだから。そうなったとき、手に職ついているほうが有利じゃないですか。裁縫の技術は通信技術ほど日進月歩じゃありませんね。もしその気があるなら、一緒に仕事しませんか。刺繍と洋裁をみっちり教え込む最初の一年は無給になります

が」
私の近況を聞くと、彼女はさらに、アトリエとして使っていた自宅マンションが事業拡大に伴い手狭になってきたので、賃貸で自宅を使わせてもらえないかという提案までしてくれた。会話の途中で歌い出しそうになったのは久しぶりだった。

家の一階は工房と倉庫、二階は目黒さんを含めた三人のお針子の居住スペースとなった。一人は目黒さんより年上のベテランの女性で、もう一人は私だ。

手揚げかばんや簡単なスカートくらいしか作れなかったところから目黒さんの手ほどきを受け、前開きのワンピースを仕立てたり細かな刺繍を施したり、少しずつできることが増えてきた。三センチ四方の方眼紙に図案をデザインしているときなどはとことん熱中してしまう。セツが危惧する以上に視野が縮んでいる気もするが、私はこの手仕事を深く愛するようになっていた。自分で描いた図案を自分で刺すような完結した作業でも、ときとして私自身知らなかったやり方がひとりでに浮かび上がってくる。ひとかどの捨て鉢さで過ごした高一の一時期ですら、文字を書くのが好きだった。他の誰でもない自分が、誰のものでもある文字を書きとめていく、音もない一致の連続。形を変えてそれを何度も経験している、と思う。

そういうとき無性にセツと話したくなる。――あの晩あなたは、森瀬と私に説明してくれたでしょう。本人がまだ自覚していない、自己の背後にあるものも含んだ目録を築くことについて。私は時々そのつづきを思い描いてる。もし、皆の普段使いの心の後ろに散らばってる雑多な思いや無名の欲望まで、全部ひとしいラインに出揃うことがあるなら、私

と他人の距離はそれまでより格段に縮まるんだろうか。縮まっても消滅することのなかった距離に象^{かたど}られた自分なら、それまでより格段に知ることができるとだるうか、って。

海を越えて届く厚い封筒の中身は写真だ。

光る空の下、青果市場。デモ隊と治安部隊との衝突。欄干におびたらしい鳥のとまった橋を渡るビジネスマン。かろうじて繋がっているような穴だらけの服を着た子どもたちの厳肅な目つき。霧雨に包まれた白樺の林。病気の犬の爛^{ただ}れた皮膚。使用法のわからない華やかな玩具。青い目のコメディアンがおどけているテレビ番組。見たこともない文字の背表紙が並ぶ図書館。緑の運河を行く白い舟。撃たれたあとのように腕から血を流して歩く女性。汚れた河口に密集して浮かぶ魚の腹。ほっそりとした風の音が聞こえてきそうな岩山の頂。煙突から吹き上がる黒い煙。空港と三日月。

いくつの国境を越えて撮影されたのか見当もつかない多様な写真が最初にごっそり届いたとき、私はとても静かに戸惑った。ひっそりとしか戸惑えなかった。その多様さをいつときに見ることは、自分が膨大な要素の中のささやかな一部でしかないと告げられることと、ひとしかったからだ。それから、「佐原さんなのか」と、やはりひそやかに理解した。この写真の束を見て初めて、彼が今はまだ目として耳として鼻として、手として足として生きているらしいと知ったのだ。私はそれを手近に置いてすっかり記憶してしまうほど繰り返した。被写体がレンズ越しに見つめ返している撮影者の影法師が、まれに映り込んでいるときぐりとした。

写真の詰まった封筒はこれまでに三通届き、今日、四通目が郵便受けに入っていた。

力をこめて拭いたガラスのように光沢のある十一月の正午だった。時間を惜しまず両親が手入れしてきた芝生を、最初に見たとき目黒さんは「CGかと思った」と表現したが、今や庭は野生の迫力に満ちている。

しんなりした手ざわりの薄茶色い封筒には、一列びっしり切手が貼られ、癖のないアルファベットで宛先と私の名前が書かれている。何度も目でたどりながら廊下を歩いた。食堂では二人が、昨夜私が仕込んだおでんについて、大真面目に品評しながら食べていた。

私は隅のソファに体をうずめて写真を繰った。一瞬前まで想像するこ
とさえできなかった大量の具体的な光景は、私にあらゆる思いを中断させ、そこに集中させる。撮影者が居た大量の「ここ」に次々と切れ目なく引き寄せられていくのは、移動の感覚だ。彼は彼自身が存在しない世界と同質の世界を見、聞き、嗅いで、今このときもどこかを移動しつつづけている。

先に食べ終わった目黒さんが隣にきて腰掛けた。彼女が郵便物の内容を察しているのは顔つきからわかった。佐原さんと自分の関わりの変化について、私はこの人にいちばん多くのことを話した。

「私がある日突然裁縫箱担いでどこかへ行ってしまうかもしれないって、目黒さんは今も思われますか」

にやにやして尋ねてみた。「流し」の職業形態になるときに備えて手に職をつけておくよう彼女は言ったが、それはありえない仮定に思えた。この工房でずっと働きたかった。

「ええ、そう思いますね」目黒さんは、鳥取砂丘に駱駝らくたはいますかと訊かれた人のように、考え込むことなく応じた。「逆のことも起こりうると思ってますよ。もし彼が帰ってきたとき、佐原清丸として再び生きさせることができるのはあなたしかいない」

私は笑って首を振った。風のない日で、食堂の窓枠が切り取る景色は写真のように静止していた。葉を落とした庭木の梢こずえがその四角い青空いっぱいに冴えた網目模様を描き、遠近感は潔く省かれている。

「でも人は、まだ決まるべきでないときに決まらないために、奇妙で美しいほころびをいくつももっているものです」

目黒さんは弟子を諭した。

この郵便も、ほころびだらうか。

もしいつか送られてくる写真の中に自分の姿が映っていたら、私はその一枚を焼いてこの街を出て行くだろうか。
手紙は同封されておらず、毎年十一月、私の誕生日近くに送られてくる。差出人の名前はない。

〈完〉

牧田真有子（まきた・まゆこ）
80年生。「椅子」で「文藝界」新人賞奨励賞を受けデビュー。人が抱く寄る辺なさと、世界が孕む不確かさを、丁寧にすくいあげ描きとる。主な作品に「予言残像」（群像）10年6月号、「動物園の絵」（『早稲田文学』⑥）など。

早稲田文学・オン・ウエブ

copyright by Makita Mayuko 2014

published by wasedabungaku 2014